

敦煌出土『浄土法身讚』について

上うえ

山やま

大だい

峻しゆん

(龍谷大学)

一

八世紀の後半、中国浄土教の新しい動きとして一世を風靡したものに、法照禪師(八世紀後半)の五会念仏の浄土教がある。かれの著作は、中国本土では散逸してしまつたが、日本や敦煌石室に遺つており、塚本善隆博士が、それらを渉猟し、法照禪師の全貌を説明されたことは周知のところである。本稿でとりあげる『浄土法身讚』は法照撰『浄土五会念仏誦経観行儀』下巻(敦煌出土P二九六三、大正・二八二七番に移録)に「浄土法身讚 此讚通一切処 釈法照」の記を具して編入されているもので、法照の著作と見なされるものである。この書は、S三八二によって大正・二八二八番に収録されるものと同内容であるが、これには「大乘浄土讚」と題記されている。右の二点のほかに、最近、フランス国民図書館より入手した敦煌写本の中にも、この書のあることを確認し、現在までに合計六点の存在を知ることができた。この頻度はかなり高く、なぜ、この書が敦煌でそんなに用いられていたのか、敦煌仏教の解明の上からも考えてみなければならぬことである。写本の観察、内容の検討などを通して、その事情を探ってみたいと思う。

現在までに判明した『浄土法身讚』の写本は左のようである。

(1) P 二九六三

首部を欠くが、巻末を完備し、次の尾題と奥書を有す。

「浄土念仏誦経観行儀巻下

時乾祐四年歲次辛亥（九四八）蕤賓之月冀彫十三葉 於岩泉大聖光嚴寺講堂後弥勒院写故記」

塚本博士の言われる法照撰『五会法事讚』広本に当るもので、それに収める第四十五番目に該書が写される。題記は前出のとおりである。厚手の粗悪紙に木筆で写され、達筆ではないが謹直な写本である。裏面紙縫には書写人あるいは所有者を示す「福俊」のサインがあり、この卷子が、単なるメモではなく、正規にして重要な典籍として写されたものである形跡を認めることができる。裏面は後に利用され「南宗讚」など、二、三が写される。先述の如く大正藏経に収録しており、『浄土法身讚』は大正八五・一二六四〜五頁の個処に当る。

(2) S 三八二

「大乘浄土讚一本」の首題を有す。本文は完備するが尾題は欠く。厚手紙で、やはりP 二九六三と同時代と見做しうる。一紙だけに写しており、単独に受持していた形跡がある。大正八五・一二六六a〜d頁に録文される。

(3) S 三〇九六

首尾題ともに欠く。音通からくる誤写がかなり多い。一枚だけの写本。厚手の紙で、時代は前と同じ頃とみなしうる。

(4) P二四八三

(一)「帰極楽去讚」―(二)「太子五更転」―(三)「往生極楽讚」―(四)「五台山讚文」―(五)「五台山讚并序」―(六)「宝鳴讚」―(七)「印沙仏文」―(八)「臨曠文」―(九)「太子五更転」―(十)「大乘浄土讚卷本」の連写の最後に写される。首題は具備するが末尾は「……鉢中不現金」までで止筆している。また「池裏金沙水……」以後は、五言の偈頌の区切りを行わず写している。時代はP二九六三とはば同じと判断できる。木筆・厚手紙の写本である。

(5) P二六九〇

『大乘二十二問』の写本(尾欠)の裏面に、(一)「敦煌武拾詠一首」―(二)「出家讚一本」―(三)「禪門十二時」―(四)「大乘讚」―(五)「南宗讚」等を雑に連写し、この中の(四)に該書が写される。乱雑な木筆字であるが、紙質や筆跡からP二九六三とはば同時代の写本と見做しうる。なお、きわめて異例なことであるが、この書にかぎり、左から右へと行を追って書写されていることが目を惹く。

(6) P三八三九

「□□浄土讚」の首題と「浄土讚一本 十二時」の尾題を備えた単独の完本で、稚拙で普通の誤写の多い写本である。やはり時代はP二九六三と同じ頃と思える。

右の諸写本のうち、P二九六三は、解説したように整った写本であるが、他は普通の誤字などの多いものである。単独の写本は、実際にそれをもって読誦していたのではないかと思われる。写本の年代は、P二九六三の九四八年の記年が規準になるが、各写本とも大体この時代のものと思做してよい。この頃敦煌は曹氏一門によって支配されている頃であるが、出土写本には、この時期に属するものとして、いまの讚文類のほか、変文や講経文、曲などが頻出する。これらの資料によって、この時代の仏教は、音曲を加味しての儀式や大衆を集めての布教説法を特徴としていたので

はないかと推定できるが、引声念仏の法照の讚文類の写本も、そうした仏教界の傾向の中で読誦に用いられ、その必要の為に写されたものと思われる。

三

教義を讚文や詩頌にして読誦する傾向は、禅の方面でも進んだらしく、同じ頃、浄土系のものだけでなく「十二時」とか名付けられている禅関係の讚文類が多くなる。ところで、P二六九〇では、本来、浄土教側に属すべき『浄土法身讚』が『禅門十二時』『南宗讚』という禅の讚文類と共に写されていることが注目される。またP二九六三も裏面に『南宗讚』を写しており、禅関係の人が巻子を使用していた跡がある。

『浄土法身讚』は、禅の讚文となぜ一緒にされるのか。そこで、この書の内容が注目されるべきであるが、一読して分るように、ここには実に大胆に禅と念仏との融合が説かれているのである。本文より該当文を摘出してみよう。

(一) 内の数字は本稿末の録文資料での行数を示す。

- (イ) 「念者入ニ深禅。」(9) 「念即知ニ無念。無念是真如。」(9) 「念即無生。」(15)
- (ロ) 「西方在ニ目前。」(9) 「浄土在ニ心頭。」(11) 「諸仏在ニ心頭。」(12) 「觀レ像而無レ像。」(4)
- (ハ) 「意珠恒自浄。」(3) 「意珠恒栄徹。自性本円明。」(15) 「心中有ニ宝鏡。不レ識ニ一生休。」(11)
- (ニ) 「洗ニ却意中泥。清浄無ニ塵垢。願証ニ菩提。」(6) 「塵勞須ニ断却。宝坐自然迎。」(7) 「宝鏡人家有。愚人_ニ解磨。不_ニ曾返自照。塵垢更增多。宝鏡人家有。智人即解磨。勤々返自照。塵垢不_ニ来過。」(13) (14)
- (ホ) 「真如寂不_レ言。口談ニ文字教。此界妄想禅。」(17)

右の諸句によってみるに、法照は、念(仏)＝禅とする。そして、この念は、禅の立場である無念、無生にはかな

らないと言っているのである（イ）。また、西方浄土を心的産物とみる。指方立相の浄土を建て、観仏観相することを認めない（ロ）。心性清浄説に立ち、払塵により菩提に到るとする（ハ・ニ）。文字による教を認めぬ不立文字の立場に立つ（ホ）。また、末偈の「道逢良賢……」の文は『楞伽師資記』にもみられるもので、禅の伝灯のあり方を示すものである。

要するに、本讃文は、その基調をむしろ禅の立場においており、無念、無生が念仏と等しいと解するところで浄土教との接合を企てたものであるとみることができよう。

浄土教家に見做されている法照の著作が、このような内容をもつことは奇異である^④。しかし、かれの本貫や学習の系譜をみると、この点はあるべきこととして理解できる。すなわち、かれは漢州（四川省地方）の生れで、同じくこの地方を本貫とする承遠（七二二～八〇二）について念仏門に帰した。ところがこの承遠は、処寂（六六五～七三三）に師事した経歴がある^⑤。この処寂については、弘忍―智詵（六〇九～七〇二）―処寂―無相（六九四～七六二）―無住（七一四～七七四）といういわゆる『歴代法宝記』系の禅の伝灯に位置する人物として知られる^⑥。この四川の益州浄衆寺無相（≡金和上）は「無憶・無念・莫忘」を標榜して一家を成したが、かれは一方、引声念仏をも教導したという。『歴代法宝記』には、そのことについて次のように記している。

「金和上（≡無相）、毎年十二月と正月に、四衆百千万人の与に受縁す。道場を蔽設し、高座に処りて説法し、先ず引声念仏して、一気の念を尽くさしめ、絶声停念し訖りて云く、無憶・無念・莫忘。無憶は是れ戒、無念は是れ定、莫忘は是れ恵なり。此の三句の語は、即ち是れ総持門なり。」^⑦

すなわち四川で興った浄衆禅門においては、八世紀、浄土教及び引声念仏も行われていたということである。法照がちょうどこのころ四川で生れ、この禅門に属す承遠より教えをうけていたということは、かれが五会念仏という引声

念仏をひろめたということ、『浄土法身讃』にみるような禪・淨融合の著作をのこしたことを納得させるものであらう。

四

敦煌の仏教は、特殊な時期を除いては、殆ど中国本土の仏教に素材を得て形成される。推移も本土のそれと無関係ではない。しかし、地理的にも政治的にも別天地である故に、この地に興亡する仏教が中国中原仏教の模写であると短絡的に片づけてしまいうわけにはゆかない。^⑥ 中原の動きとの同異を検討して、敦煌仏教の独自性を明らかにしてゆくことが重要である。

敦煌において、法照の讃文が流行し、なかでも『浄土法身讃』が禪の側でも用いられていることは、大局的に言えば、中国本土における五会念仏の流行、禪・淨融合の趨勢が敦煌に波及したものとして理解することができよう。しかし、隋・唐の中央の支配の強い時代は別にして、敦煌は中原の文化を受け入れ伝承するにしても、それなりの根拠と姿勢をもっている場合が多い。^⑦ それについて、法照の『浄土法身讃』のうけ入れについて、次のような点を考慮してみたいと思う。

敦煌には、土地柄として概して、いろいろな教学や典籍が各方面から流入する。そしてそれらが狭い土地において雑居的に並存する。淨土教は当然ながら、禪の流行の跡もこの地の遺物に顕著に見ることができるところで、この地の禪について、四川の無相―無住などの『歴代法宝記』系のものが支配的であることが最近だんだん判明してきた。したがって、四川を本貫とし、同じ系統の禪の影響をうけている法照の作品は、この地の禪の徒にとってもきわめてなじみやすいものとして受入れたのではあるまいか。

前述のように、雑居的であらざるをえない敦煌において、ともに強い魅力をもつ禅と浄土を融合させる法照の思想、就中、『浄土法身讃』は両者を結びつけるものとして重用されていたところに、比較的多数の写本を遺すにいたった理由があるのではあるまいか。

禅や浄土をはじめとして、いろいろな仏教活動が敦煌でどのように具体的に行われていたかについて、まだまだ未知の点が多い。紙数の制限のため大まかな論議となったが、『浄土法身讃』への注目が、今後の考察への一支柱を提供することになれば幸である。^⑥

附記 真宗連合学会の際には「唐代浄土教の一面」の標題の下に発表したのが、作稿に当って改題したことをお断りする。

註

- ① 塚本善隆『唐中期の浄土教』一九七五。
- ② 拙稿「敦煌仏教の盛衰」『アジア仏教史』中国編Ⅴ、校成出版、一九七五、一七五—一八三頁参照。
- ③ 法照の依った禅が、どのようなものであったかは更に検討を加える必要がある。無念の説は、神会の主張と言われるもので『歴代法宝記』でも採るものであるが、(一)に指摘した弘塵の思想は、北宗系のものである。当時の禅思想のあり方が、未だ明確でない段階であるので、『浄土法身讃』の禅思想の検討は、当時の禅の解明のための資料ともなりえよう。
- ④ 塚本博士も法照の著作の中で、『浄土法身讃』が特異なものであると指摘される(塚本前掲書、二四四頁)。しかし、他の著作(たとえば『西方極楽讃』)にも、禅的傾向は現れており、著作の事実を疑うまでには到らない。
- ⑤ 塚本前掲書、一一九頁参照。
- ⑥ 『歴代法宝記』系の禅については、最近、解明されるどころが多く、成果は、柳田聖山、小島宏允の論に詳しい(『初期の禅史』Ⅱ、筑摩書房、一九七六所収)。
- ⑦ 『初期の禅史』Ⅱ、一四五頁より。
- ⑧ 前掲拙稿『アジア仏教史』Ⅴ、一五七頁参照。
- ⑨ 中原で盛んなものが、必ずしも敦煌でよく学ばれ、流行っていたとは限らない。搬入する人物があり、受け入れて講義するなどのことを通して、定着するようである。もちろん既存の文化からの取捨も加わるに違いない。また、一たん受け入れたものは、かなり長期間にわたって伝承する傾向もある。この点、日本における中国仏教の受け入れにも似たものがある。八世紀の後半の法照著作の流行が、なぜ敦煌では約二百年遅れた九世紀中頃にお

⑩ ことっているのか。単に距離が離れているというだけでない理由があるように思えるが、いまは明瞭にさせえない。本稿では、主題を敦煌における禅・淨融合の問題に限ったが、このような傾向は八世紀以降、中国仏教の辿った

資料 諸写本校合『浄土法身讚』

原 P 二九六三 甲 S 三八二 乙 P 三〇九六

丙 P 二四八三 丁 P 二六九〇 戊 P 三八三九

* 甲 乙 丙 丁 戊 の五写本

1 浄土法身讚

此讚通一切处誦

积法照

2 法鏡臨空照

心通悟色堅

神通妙利立

法界惣同然

3 意珠恒自淨

神光遍十方

知心無处所

解脱得清凉

4 観像而無像

高声不染声

了知無所有

恵鏡朗然明

5 寂寂幽靈靜

恬然無所縁

坐臥空霄裏

超出離人天

ものでもあった。敦煌にはそうした動向を裏付けるための具体的資料が保存されている場合が多い。敦煌における禅・淨のあり方は、中国仏教の趨勢を示唆する意味をもつものである。

1 ①浄土法身讚 大乘浄土讚一本甲、欠乙、 大乘浄土讚老本 丙、 大乘浄土讚丁、 浄土讚戊 ②〔此讚通一切处誦 积法照〕— 五

2 ①臨 林丙戊 ②心 身丁 ③通 同戊 ④悟 五戊 ⑤堅

現甲丙丁戊、 見乙 ⑥神通妙利立 見心淨妙察乙丙丁

戊、 現心淨妙察甲 ⑦惣 亦甲乙丁 ⑧同 通戊

3 ①珠 取乙、 諸丙戊 ②神 身戊 ③光 心丙 ④遍 照

⑤知 至甲乙丙戊、 互丁 ⑥处所 处住甲丙、 住处

乙丁、 所了戊 ⑦涼 淳戊、 梁乙丙

4 ①像 想甲乙丁戊、 相丙 ②而 如甲乙丁戊 ③声 心戊

④了 料甲乙 ⑤知 諸戊 ⑥所 取戊 ⑦朗 浪戊

5 ①寂寂幽靈靜 笨子由空淨戊、 則子由空淨甲、 笨子油空

淨乙丙、 笨子遊空正丁 ②恬然無所縁 悟則無所縁甲丁、

悟里無所縁乙、 悟李無所無丙、 五句無取有戊 ③霄

消甲乙丙戊 ④裏 理丙戊 ⑤超 照乙 ⑥離 裏甲乙

6 暫引池^①刃立^③ 洗却意中泥^④ 清淨無塵垢 願汝証菩提

7 惠鏡無令闇^①^②^③ 智珠常用明^④ 塵勞須断却 宝坐自然迎^⑥^⑦

8 注想常觀察^①^②^③ 三昧宝王珠^④^⑤ 洞閑三藏教^⑥^⑦ 弘却意中泥

9 人今專念仏^①^② 念者入深禪^③^④ 初夜端心坐 西方在目前

10 念即知無念^①^② 無念是真如^④^⑤ 若了此中意 名為法性珠^⑦^⑧

11 淨土在心頭 愚人向外求^①^② 心中有宝鏡 不識一生休

12 諸仏在心頭 汝自不能求^① 慎勿令虛過^③^④^⑤ 急手早勤求^⑦^⑧^⑨

13 宝鏡人皆有^①^② 愚人不解磨^③ 不曾返自照^④^⑤ 塵垢更增多^⑥

14 宝鏡人家有^① 智人即解磨^②^③^④ 勤勤返自照^⑤^⑥ 塵垢不來過

6 ①暫||整丙丁戊 ②引||到戊 ③池||他甲、||除乙 ④洗||
燒丙 ⑤汝||以甲乙丁、||如戊

7 ①無||勿丁 ②令||靈甲乙 ③闇||暗丙、||開丁 ④珠||者

甲乙丙戊、||中丁 ⑤須||雖甲乙 ⑥坐||威戊 ⑦迎||明戊

⑧迎+ (池裏「||練甲、||令丁」) 金沙水「||数丁」 蓮「||

連甲乙丁」中法性流 花開化生子「||花子丙」 說「||談乙」

我本根由「||油乙丙、||猶丁」戊

8 ①注||住甲乙、||処丙戊 ②想||相丙 ③常觀||觀常丙 ④

昧||妹乙戊 ⑤珠||真戊 ⑥洞||同丁、洞閑||巡還甲乙丙戊

⑦教||数甲 ⑧弘||弗||甲乙、||沸丙、||仏戊

9 ①人今||有人戊 ②專||転丙 ③者||仏戊 ④深||心丙

10 ①即||則甲乙丙戊 ②知||如戊 ③真||珠乙 ④若||為丁

⑤了||料甲乙 ⑥此||次丙 ⑦名||為||是名戊 ⑧性||姓戊

⑨珠||除丙戊

11 ①愚||遇丙、愚人向外求||諸仏不能求戊 ②求||來丙 ③心

||深甲乙

12 ①汝自||如此甲乙丙戊 ②慎||其甲乙丙戊 ③勿||物甲乙丙

④令||靈甲乙丁 ⑤虛過||希有甲乙戊、||虛遇丙丁 ⑥「急

手……返自照」二〇字欠—丁 ⑦手||守丙戊 ⑧早||深戊

⑨求||修甲乙丙戊

13 ①「宝鏡……更增多」二〇字欠—戊 ②皆||衆丙、||家丁

③「愚人……人家有」二〇字欠—丙、愚||遇乙 ④曾||能甲

乙 ⑤自||手甲 ⑥增||曾甲乙

14 ①人||家戊 ②智||遇丙、||知丁 ③即||則甲乙丁 ④磨||

